

三宅一郎・山本嘉一郎著

## 『SPSS 統計パッケージ I 基礎編』

東洋経済新報社, 1976年, A 5 判, xviii+263ページ

「データ解析の第2の革命が現在進行している。…それはプログラムパッケージと呼ばれる新しいコンピュータの利用技術の出現である。これを用いるなら、いままでコンピュータに接したことがない人でも、わずかの学習で自分のかかえるデータをコンピュータで自由自在に解析できるようになる。」(『データ解析入門——SPSSの招待』司馬次編著, 1977, 東洋経済新報社) そのような「プログラムパッケージのうち最もすぐれた機能をもつ SPSS (Statistical Package for the Social Sciences)」(同書) は人口問題研究の分野にも序々に影響を与えつつある。アメリカ人口学会 1976 年大会の “Computer Utilization in Demographic Research” 分科会では、Public Use Sample および Census Summary Tapes の集計のために SPSS をさらに充実すること、SPSS と類似した General Package for Demographic Analysis (GPDA) が必要であること等が議論されている(『Population Index』42(3), 1976)。わが国においては、SPSS がここ 1, 2 年の間に全国各地の大学の計算機センター等に急速に普及した結果、SPSS を利用した社会科学、自然科学の研究成果がしだいに、多くなっている段階である。

SPSS を利用して実地調査などのデータ解析を行う場合のメリットは多岐にわたる。最大のメリットは、研究者自身がコンピュータの専門家の手をわずらわせることなく、データの解析を逐次、部分的な結果を見ながら、コンピュータと会話をしながら進めることができることである。また、SPSS の機能の利用を前提とすることによって、調査研究の諸段階を様々に改善することができる。調査票を被調査者本位にできること、コード化を正確かつ柔軟に行うこと、あるいは集計段階で地域比較や年齢別比較のために調査サンプルを構成しなおすことが自由にできること等々。大量のデータ解析をとまなうことが多い人口問題研究においては、このようなメリットをもつ SPSS はまことに便利なものといえよう。今後、調査研究データの解析用のプログラムパッケージを開発する場合、プログラミング言語の FORTRAN の場合のように、SPSS を避けて通ることができなくなる可能性が大きい。

この書評で取りあげるものは、日本語による SPSS のもっとも完全なマニュアルで SPSS の実際の利用にあたって不可欠のものである。内容は、SPSS の文法的構成にそったもので、SPSS の原開発者による解説書 (Nie, Hull, et. al., SPSS second edition, Mc Graw-Hill, 1975) の構成、表現を多くとり入れているが、エラー索引など独自の工夫がなされており、三宅による旧版の著書よりかなり使いやすい。多変量解析の統計プログラムは大部分がⅡ解析編(既刊)に譲られているが、基礎的統計に関してはⅠ基礎編で足りる。

さきに引用した司馬編著の書は SPSS の入門書としての特徴を多く備えており、全体の構成は、SPSS の文法構成にとらわれず、データ解析の手順にそって記述する方法がとられていて初心者にはわかりやすい。豊富な例題の解説も SPSS の適用自体を習得することに力点が置かれている。コンピュータについて全く知識のない研究者が SPSS について知り、SPSS の導入、適用をすすめようとする場合には最適の書であるといえよう。

なお、人口問題研究者の手に入れやすい文献で SPSS についての簡潔な評価は Jeanne Cairns Sinquefield, “A Review of Small Canned Computer Programs for Survey Research and Demographic Analysis”, *Studies in Family Planning*, 7(12), 1976. にある。上記の書はわが国における SPSS の普及、発展に大きく寄与するものであり、そのことを通じてわが国の統計パッケージ全体が飛躍的に発展することを期待したい。

(廣嶋清志)